

あ・うん

金剛禅総本山少林寺広報誌

vol.
23

2012 文月・葉月

教学

ダーマの徳性と
人間の霊性について(上)



ダーマの徳性と人間の霊性について(上)

今号の特集では、「人は皆、無限の可能性を秘めた種子」と信じて努力することを説く金剛禅思想の根本を再確認する。少林寺拳法をはじめとする修行の土台になるためしっかりと理解したい。

宗務局長 田村明

ダーマの分霊としての人間の存在

教範第一編二「宗教とは何か」の最後に次のようにある。

故に我々は、生神も生仏も必要とせず、祈禱も、まじないも、占いも必要としない、人間生活を確立するため、人間一人一人がダーマの分霊をもつ、万物の霊長であることを自覚して、すべての人が「ダルマ」になることを目標に努力し修行すれば、いつか必ず現世に平和で豊かな理想の楽土を建設出来ると信じて、ここに新しい形をもった物心一如、自他共衆の金剛禅運動を同志と共に展開しているのである。

この章は、金剛禅の宗教である所以を展開し、正しい宗教観を述べ、金剛禅が真の宗教であることの意義

が述べられており、正統仏教を継承するものであることが書かれている。また、上記のところでは人間の存在とその心のありよう、万物の霊長であることの自覚が述べられている。

万物の霊長とは、単に「万物(宇宙)に存在するすべてのもの、ありとあらゆるもの」と言う意味)の中で最もすぐれているもの」との解説では足らず、万物の中でも人間だけが、計り知れない自然の徳を受けている存在なのである。

「ダーマの分霊を持っている」ということは、人間は精神(靈魂)と肉体の二つの部分から成り立っていると見るのである。このことは、脇本平

也氏も『宗教学入門』の中で「人間の二元的構造」として述べている。

教範第一編十二「金剛禅の主張と願い」。(1)教え、(2)悟り、(3)主張と願い、の三つに分けることができる。この中の悟りの部分は次のとおりである。

そして、**大宇宙の大生命ダーマの分霊**を持つている人間が、他の犠牲によつてのみ、自分達の繁栄があるかの如き思想に支配されている限り、人類の真の平和と発展はあり得ないと痛感し、一人でも多くの人が人間本来の使命を自覚して、人のため世のために役立つ人間になろうとしないう限り、此の世に平和で明るい理想の楽土は実現しないと確信したからである。

大宇宙の大生命ダーマの分霊も上記に述べた二元論であり、まさに人の質の問題であるといえる。

教範第一編十三「金剛禅の教義」の後半では、次のようにある。

人間は、この**大宇宙の大霊力の分身として存在し、その分霊たる靈魂**を所有していることを認識する。故に靈魂(人間の身体内にあって、その精神と生命を支配すると考えられている人格的、非肉体的な存在を言う。仏教の立場で言えば、不滅の靈魂という言い方において**仏性**ということになる)とその住家である肉体を修養すれば、その本然(もともとからその通りであること、生まれつき)の霊力を顕現(はつきりとした形で表すこと)せしめて、無病強健、歓喜悦楽の人生を経験して、天寿を全うし得ると認識するものである。茲に於て、我等は、大霊力ダーマに信心帰依し、大聖釈尊の遺教たる、自己を確立し、己れを寄り所とする道を極め、祖師ダルマの遺法を奉じて、精進修行し、靈肉一如、行念一

致の修行の功德によって必ず成道し得ると信ずるのである。

なお、これは門信徒全員が持っている教典の裏面にも「教義」として記載されている。

ダーマの存在に対する理解はもろろのこと、大霊力の分身としての存在、そしてその分霊たる靈魂について述べられている。大霊力ダーマを認識し、信心帰依することが始まりであると展開する。二元論と同じくここで「靈肉一如」が述べられており、靈魂と肉体は二つの異なるものではないとしている。その上、「行念一致」では信念と行動の絶対両立が述べられている。

さらに重要なのは、註Ⅱ4に記載された内容である。

我々は、その「はたらき」の存在を認識すればよいのである。そしてその「はたらき」の力によって人間が生まれ、生きているということを認識し、生きていることに意義を見出し、ダーマの分霊を持つ人間として生を有意義なものにしなければならぬのである。

これは非常に大切なところで、何故わざわざここに註として繰り返されているのかを読み取らなければ

ならない。なぜならこれがまさに「ダーマの徳性と人間の靈性」のことだからである。やつとここで、ダーマの徳性と、人間の靈性につながるっていくのである。

教範第一編十五「ダーマの徳性と、人間の靈性の関係詳説」には次のように述べられている。

人間は、ダーマの徳性即ち分霊をもつて生れてきた万物の靈長と認識する。そして、この分霊たる人間の靈性は、育つ可能性を有する種子と理解して、之を育て、開花結実させるために、修行努力しなければならぬことを知るのである。

また道訓には、次のようにある。

凡そ人心は、即ち神なり仏なり、神仏即ち靈なり……

この意味を僧階教本『金剛禪の教典』には、「もともと、ダーマの分身である人の心そのものが神や仏なのであり、神仏とは人の本質である『たましい』でもある」とある。どのような信仰の対象を持っていようと、人が皆大いなる働きによって生かされている事実が変わらない。「天」であれ、「神」であれ、「仏」であれ、大いなる働きの根源は一つである。人はこの偉大なるものの「分霊」

として存在するという開祖の考えによる、と解説している。

心に恥ずべきことのない生き方をする。しかし、その心とは天であり、人間としての正しい生き方のことなのである。ここでは、自我は存在しないのである。

教範や道訓、信条の中で、ダーマと人間との関係を述べているが、先ほど靈魂のところでも触れたが、「たましい」とは「仏性」のことであり、金剛禪では「ダーマの分霊」と言っている。開祖は、それを、「生かされている自分の存在を意識することであり、その魂と肉体を修養すること、それが人間の靈性を高めることであり、どのようなにも育つ可能性を秘めた種子だと理解せよ」と言っている。自然の仕組みとしての存在、そして命。自分自身の身体、それはその命「魂」の住家であり、身体のことである。このことは、教範第三編第二章「四、人の靈止たる我の認識」の中、知性や理性即ち魂魄

……魂は天、即ちダーマよりうけた分霊としての「良心」と信じ、人間の心が知性や徳性の発現をうながす靈性と考へ、魄は自我、即ち本能的な意欲や情動をおこす悪い方の

「心」と見て居る。そして精神修養というのは、自我、即ち己れの魄を修め、靈性である魂を養って、人が靈止としての働きを全うするように、修行することを言っている。

ここでもダーマの分霊としての人のありようが述べられている。魂の住家である肉体を鍛え、本能的な行動や情動を起こさせる自我の心(魄)を修め整え、靈性である魂を養うということである。

われわれは、生かされていることに気づいたならば、そこにあるのは「感謝」の念である。では何に感謝するかを考えてみると、道院で鎮魂行の時に毎回唱えている信条の第一にある。

一、我等は、魂をダーマより受け、身体を父母よりうけたる事を感謝し、報恩の誠をつくさんことを期す。

われわれはダーマと父母に命そのものを頂いている。すなわち生かされて自分の命があるのである。ここでの命とは、連綿と続く「自然の仕組みとしての命」、そして自分自身の肉体とともにある「親から頂いた個人としての命」の両方のことである。

言いかえれば、計り知れない自然

の中での命の繋がり。そして父母より愛に満ちあふれて誕生した命のことである。だからこそ、命の大切さを知ることが必要であり、天より授けられた大切な命であることを認識することが大切なのである。

まさにここでは、魂を受けたことへの感謝が述べられているのである。大いなる働きのダーマ、そしてこの身体を授けてくれた父母への思いを持つことに尽きる。それを「報恩の誠を尽くせ」という。報恩とは恩に報いることであり、その行動とは「人間らしく生きる」ように勉めることである。だからこそ実践綱領である「道訓」に次のように記載されている。

人生れて世にある時、人道を尽すを貴ぶ、まさに人道に於て、はざる處なくんば、天地の間に立つべし、若し人あり、仁、義、忠、孝、礼の事を尽さざれば、身世に在りと雖も、心は既に死せるなり、生を倫むものとゆうべし

これは、「まさに自分の命の大切さや生かされていることに気づき、人としての生き方ができないのであれば、それはただ生きているだけで、何の意味もない。まさに肉体は生きているが、心は死んでいるとい

うことで、命を天から盗んでいる」と言っているのである。

人として何をするのか、人として何ができるのかを問うているのである。それは、教範や教典すべての根底にあり、教えの根本である。そし

霊性とは、そして今を生きるとは

霊性そのものをはっきりすること大切である。前述した脇本平也（東大名誉教授）はその著書『宗教学入門』で人間の二元的構造として、「一般に宗教的人間観には、共通の傾向といってもよいかと思われる。その代表的なものの一つは霊肉二元論です」とし、「人間は、肉体と

霊魂の二つの部分から成り立っている。この両者は、原理的には相対する性質を有しながら、しかも、共に結合して人間というものを存立させている。このような『霊と肉』とか『精神と肉体』とかいった二元観は、キリスト教のような有神の宗教だけではなく、仏教その他の無神論的宗教にも、さらには宗教以外の人間観のうちにみられます」と。そして「自己ないしは自己の中核を霊魂とみる信仰は、さまざまな方向への広

て「命」は「自然の仕組み（ダーマ）」として与えられた命」と「自分として意識する命」を考え、命はまさに与えられたものであり、自我として自分勝手に人との関わりを考えない命などないとしているのである。

がりを示します。それによって自己のあり方や生き方を規定したり、あるいは自己不滅への願いに応えたりするわけです」と表している。社会的人間としての必要な宗教の基本知識として宗教学を展開している。

量義治（埼玉大学名誉教授）もその著書『宗教哲学入門』で鈴木大拙の「即非の倫理（精神と物質とをその内に含むことが出来るのが霊性である。霊性においては精神と物質とは二つで無くて一つであり、また、一つであつてそのまま二つであるとした説）」を紹介しながら「存在の根本義」として「霊性の論理」を紹介している。そして、信も望も、さらに付け加えるならば、愛も、知とは全く異なるものである。知が知性の事柄であるのに対して、信・望・愛は霊性の事柄である。知は有根拠である

のに対して、信・望・愛は無根拠なのであるとしている。

このように、心と身体は別々ではないという考えはあらゆる所で研究されている。われわれでいうところの霊肉一如であり身心一如である。われわれはその霊を大宇宙の生命ダーマの分霊を持つと認識しているのである。

開祖が繰り返し述べられている「霊性」は、今を生きているわれわれがその「命」を感じて、感謝の心を絶えず持ち、人としての生き方を追求していくことである。だからこそ「誰にでも仏性があり、無限の可能性を秘めた種子」なのである。

今を生きていることの重要性は、金剛禪が在家主義であること、そして、日々直面する実生活での現実こそが実践の場であるからである。金剛禪は、今この社会に生き、現実には則した教えなのである。

だからこそ金剛禪布教者は、現実社会と向き合いながら自分の修行を怠ることなく精進する者のことをいうのである。

【参考文献】

少林寺拳法教範 宗道臣著
宗教哲学入門 量義治著
宗教学入門 脇本平也著



開祖語録 ダイジェスト

1976年度
第3次指導者講習
会にて

いつも言うことだが、日本人は上に弱く、上の命令があれば聞く。自分が判断することは許されず、天皇の命令で動く、それが戦前の日本の姿でした。だから中国人は「お前たちは日本人じゃない、天皇族だ」と言った。考えてみればそのとおりなんです。

またアイケルバーガーという人が日本人は砂のような民族だと言ったが、一粒一粒見たら形も整っていて案外固そうだし、しかし砂だけでいつもバラバラのまま。日本人くらい孤立する民族はいない。

だから日本の軍隊は、私のいた満州でも、戦争に負けると、憲兵隊をはじめ正規の軍人は家族だけ連れて

少林寺拳法の原点を知ってくれ

中国人は放っておいても固まって泥の家を建てて住んでいた。砂と違って泥には粘着がある。帝王が誰に代わろうと、社会制度がどう変わろうと、彼らは横につながってたくましく生きていた。私は中国をばか

にする教育を受け、中国へ行つて、逆にその国のよさを見つけたのです。それで、日本の幸せも考えるが、中国人の幸せにも通じるようなことをやろうとした。私の10と、君の10を、どこかでうまく支え合って20にしようじゃないかと。「半ばは他人の幸せを」という考えは、だから半端ではない。半分は自分の幸せ、日本民族のため、半分は他人の幸せ、他民族のためにというのは、私が体験した歴史の事実を踏まえているのです。

清風

vol.23 宗務局長 田村 明

行動の選択

よく「誰かがやってくれればよいのに」と思う場面に出くわすことがある。電車の中で「誰か注意してやればよいのに」「誰か席を譲ってあげれば」「仕事で「誰かがこの仕事片づけてくれればよいのに」、家で「散らかってるな、誰か片づけないかな」など。恐らく気がついていてる人がたくさんいるのにもかかわらず、なかなか自分から進んでできないものなのだろう。犠牲的精神が少なくなっ

てきているのか、無関心なのか。少林寺拳法の修行者はこういった場面になると心が騒ぐ。いわゆるおせっかいの大人になるわけだ。でもこのおせっかいが普通の人にはなかなかできないのである。よいこと悪いことをはっきり言える人間になつてほしい、と道院では指導している。また、言った手前もあり指導者はそれを実行しているうちにみずからの行動規範となってくるのである。

他人に対して無関心な人間が増えてきていることで、治安が悪くなり、モラルも低下してくる。面倒なことに関わり合いたくないと思う人間が増えてきたような気がする。われわれは、正義を愛し、人道を重んじることを信条としている。自分一人でもするという義侠心と勇気が大切だ。さらにそれだけでなく、周囲の人とともに行動することが世の中をよくする始めの一步である。

士別三日、即更括目相待

「士別れて三日、さらに活目して相待すべし」。人は、三日も出会わないと思ってもよらない進歩をしていることの例えです。

無論、たった三日間で人が大きく変わるなんてことは、まずありえないことなのですが、この例えは久しぶりに会った相手が信じられないくらいに進歩していることを三日という時間で表しているのです。

この出典は「三国志呉志・呂蒙伝」からの抜粋です。

小説「三国志」を読まれた方はいまさらとお思いでしょうが、これは呉国で武力一点張りの將軍であった呂蒙が、主君に促され勉強をして有能な戦略家ならびに良識者になったことを久しぶりに出会った軍師の魯肅が驚いて、「呉下の阿蒙にあらず。（いつまでも呉国のやんちゃな蒙ちゃんではない）」と言わしめたときに呂蒙が返答した言葉なのです。

もう少し詳しく言うと、「士と呼ばれるものは三日も会わなければ変わっているものであり、しっかりと目を見開いて対峙しなければならぬ」との意味になります。

また、ここでいう士とは、言いかえれば人

の上に立つ者、つまり指導者を指しています。

さて、女心と秋の空なんていいですが、男女を問わず、人の心はよきにつけ悪きにつけ変わるものです。

ところでわれわれ金剛禪の修行者・布教者としてはいかがなものでしょうか。

長い間修行を積み重ねてきて、相手から括目して見られるような人間に成長しているのでしょうか。

目先の利害に走り、肩書や武階・法階に移りし、己を見失ってはなりません。

開祖は人としての立ち居振る舞いに対して常日頃から指摘され、われわれにその範を見せておられました。それは見識豊かで、どこか余裕のある立ち居振る舞いを心掛けることといえるでしょう。

常に自分自身に問いかけ、ダーマの分霊であることを自覚し、揺るぎない自信をつけ、今の自分を大切にしつつ、己をよりよい所に導いてやらねばならないし、又、進歩し続けなければならないのです。

これが金剛禪の修行であり、ひいては命の

尊厳を明らかにして、生きている今を大切にしていくことなのです。

久しぶりに出会った相手に失望されなためにも努力、また努力するしかありません。

「兎と亀」の話ではないけれど、油断していた相手をなめていたり馬鹿にしていたりしていると、気付いたときにはすでに手遅れで、相手は手の届かない所へ行っているのです。

そんなことにも気付かず、今どきの若い者などと批判ばかりしていると、自分自身が取り残されてしまいます。

括目して相待す、常にしっかりと目を見開いて正しく相手を見ていないと自分自身がとんだ恥をかくことになります。

自分自身胸に手を当てて自分は変わったということを自問自答して見ればどうでしょうか。変わったことを自覚することは難しいことなのですが、この問いかけをすることが大切なことなのです。

皆さん頑張りましょう。



道



自他共楽への道

豊橋道院 道院長 徳嶋 繁

少林寺拳法は単なる武道ではない、霊肉一如の修行法であり、健康増進と精神修養と護身練胆の三徳を兼備した行であると幾度となく口にしてきた。この少林寺拳法の本質が何故に「金剛禪宗門の行である」と示されたのか開祖の思いを付度し、自分自身への納得と信念にしたいと思う。

三徳に示された「健康増進」は、少林寺拳法の技法修練のどの過程で健康増進となるのであるうか。易筋行の整法の施しをもつて開祖が健康増進と示されたとは思えない。

日本の古武道や斯道の身体^{しんたい}の使い方は「上虚下実^{じょうきょげじつ}」である。要するに肩の力を緩め、腹から下を充実させよということである。つまり、「丹田」を中心とした体の働かせ方である。

少林寺拳法の技法もこの「上虚下実」の身体の使い方^{つかいほう}で無理とむだのない技となる。丹田の働きは一方では「氣」の発露となり相手に圧力をかけることにもなる。膝を柔軟に駆使し上体を捻らず正中線の立った姿勢を保つことが氣の流れを生む。修練の場で互いの「氣」の流れは「和氣」となり、道場に清氣が漂い、み

な「和氣藹々^{わきあいあい}」となり、道場は修行者の一日のストレスの解消と明日への活力を与える場となる。加えて、無理のない技は互いの楽しみとなり「自他共楽」の心を養うことにもなる。

丹田は「太陽神経叢^{しんたいしんけいそう}」に働いて自律神経をバランスさせる。この自律神経が正常に働くということが健康体であり精神が安定した状態の証である。人間の正常な判断は自律神経のバランスがとれているときに出てくるといわれている。座禅の目的の一つもこの自律神経のバランスにあることを知るとき、少林寺拳法の技法修練は単なる技の修練を越えた霊肉一如の修行であり、健康増進と精神修養と護身練胆の三徳を兼備していることが立証される。（開祖は健康増進を三徳の初めに示しておられることに意味があると思う）

武道は極めれば処世術となりうるが、人間の生死（人間苦）や欲の問題の解決には十分ではない。一方、仏教は人間苦・欲の問題の解決には有効であるが、独り悟りを求めるあまり社会性が希薄になる難がある。この両者の欠点を補い戦後復興に資する人間完成の行と

するために「武道」と「仏教」のコラボレーションが必要となる。ここに「宗門の行であり単なる武道ではない」とされた開祖の教示が見えてくる。

「正しい釈尊の教え」は金剛禪を理解するための基礎であり、正しい釈尊の教えは仏教を理解するための基礎的素養であると解される。

少林寺開創の恒久の目的は「真の平和の達成」と「世界から信賴と尊敬を受ける民族に育てる」にあると教範に示されている。

2012年の今日、世界の多くの国は民主国家としての対価（膨大な財政赤字）の対応に追われている。日本の国債総額は約900兆円・一人当たり700万円になる。

人の幸せを「物」で量ってきた時代から、開祖の教え「物心一如」の生活態度が今こそ求められている。そのためには正しい釈尊の教えと金剛禪の教えの実践が重要となる。

世の多くの人が、身心一如、自他共楽の生き方の中に幸せがあると信じるとき世界が変わると確信する。

ダイジェスト

×



志をつなぐ

vol.8

おの でら よねぞう
小野寺 米蔵 234期生
大導師正範士八段

金剛禅という教えに出会わなければ、世界観や人生観についてこれほど深く考えることはなかったと思います。生きていく価値判断を金剛禅の思想に照らして考えるようになり、自分の生き方に自信を持つようになりました。

かつて教師を目指していたこともあり、教育に対して熱い思いを持っていました。今は市の生涯学習審議

開祖の生き方から生まれた金剛禅 命をつなぐ気持ちで次世代に伝えたい

会委員や社会教育委員という立場から、地域社会の中でさまざまな実践活動のお手伝いをしています。

生涯学習は、自分の楽しみだけでなく、それを人に与えて喜んでもらって初めて本来の姿といえます。

金剛禅は人を育てる指導者への道、まさに生涯学習なのです。

※プロフィールや開祖の思い出など、金剛禅オフィシャルサイトの全文もぜひご覧ください。

1980年 第6次訪中
白 衣殿壁画前で記念撮影



ダイジェスト

×



道院長 元気の素

vol.8

やま と さくら いにし
大和 桜 井西道院
道院長 あおき としこ
道院長 青木寿子(42歳)

——道院長になって出会った感動のエピソードをお聞かせください。

先日、休眠拳士の河村亮介君から「就職先が決まったのですが、東京・三重・大阪など皆がバラバラになつてしまうので、その前に先生を囲んで会をしたい」という声がありました。会では、現役・休眠拳士が10人程度集まり、アルバムを見ながら思い出話に花が咲きました。

やんちゃだった少年少女が立派に

素直な心で、素直に生きよ

成長し、それぞれ夢に向かって進んでいく姿に道院長として改めて喜びを感じました。会の最後は後輩に対し、「次の集まりのときはお前が幹事をしてくれよ」とバトンが渡されました。いつまでもつながりを持てることは本当に嬉しいですね。これからも縁を大切に……指導者としての喜びここにあり。

※プロフィールなど、金剛禅オフィシャルサイトの全文もぜひご覧ください。

1997年8月 思い出の1枚
夏合宿(奈良県曽爾にて)



開祖忌法要

開祖の遺徳に思いを馳せる

5月13日、金剛禪総本山少林寺本堂において開祖忌法要が営まれた。宗由貴師家（しげ）をはじめ道院長ら約530人が参列し、清浄な雰囲気の中、法要が始まった。浦田武尚代表が導師を務め、献香、教典唱和、表白文奉読と続き、その後参列者による献香が行われた。

献香中は、本堂いっばいに香が広がる中、ありし日の開祖の姿と開祖の遺徳に思いを馳せながら合掌する参列者の姿が印象的であった。

献香後の導師法話では、「開祖の自他共衆の教えは創始以来変わることがない。そして、真



の幸せは人と人との関係にある」として、共に人づくりに邁進していくことを参列者と呼びかけ、法要を締めくくった。

（富田雅志）

2012年度道院長研修会

現代社会に少林寺拳法の可能性を広げる

5月中旬から6月中旬にかけて、2012年度道院長研修会を開催した。本山において3回まで開催した後、東北地区（宮城県）、九州地区（熊本県）においても開催し、約1600人の道院長が参加した。

師家挨拶や代表講話、法形修練や僧階講義を通じ、受講者である道院長は、金剛禪教団の活動方針を確認するとともに、技術・教学ともに研鑽に励んだ。

また、道院の活動事例として、鈴木秀孝板橋菩提樹道院道院長が複数道院での専有道場の共有活用について、南出哲男三重県教区長・三重壬生野道院道院長が教区活動の具体的な取り組みについて発表し、専有道場や教区が持つ可能性の広さを伝えるとともに、金剛禪活動の充実に繋げるための取り組み方法を紹介した。

そして、武藤芳照東京大学副



武藤芳照東京大学副学長

学長をお招きして講演を行っていただいた。講演の中で武藤氏は、コース制は一人ひとりの資質と能力と感性を引き出し養い育てるといふ本来の教育を体現するプログラムであり、少林寺拳法をあらゆる年代や分野の人々に愛してもらうための取り組みであると話された。また、コース制の持つ可能性とは、これに取り組む人の健康と幸福と自己実現に結び付けることができることであり、それを満たすことが少林寺拳法による社会貢献に繋がると呼びかけられた。

師家講話においても、武藤氏の講演内容や華道小原流の家元の話の例に挙げながら、少林寺拳法に照らし合わせるとともに、今の社会において少林寺拳法が役立つ存在であるためにも、必要とされる要素を取り入れて少林寺拳法の可能性を広げ、社会に目を向けることを道院長に呼びかけた。

道院活動の可能性を追求した

本年の研修会を終え、今後ますますの活性化を実現すべく、本山・道院が一丸となり金剛禪運動に邁進していきたい。

（小林博紀）

京都衣笠道院

視覚障害を乗り越え初段に合格

京都衣笠道院の林黎明拳士（44歳）が、4月1日、准拳士初段に合格した。林拳士は全盲であるが、同じ視覚障害者の男性が路上で絡まれている場面に遭遇したのがきっかけで金剛禪に入門した。以来、熱心に修行に励み、6年の歳月を経て、見事黒帯を手にした。

「努力すれば達成できるという自信になった。精神力を養うことができ、自分を変えてくれた少林寺拳法の魅力を広めた」と話している。（長野享司）



修練に励む林拳士（左）

お礼

少林寺拳法グループ 東日本大震災復興支援本部

この度は、少林寺拳法グループ東日本大震災義援金をお寄せいただき厚く御礼申し上げます。皆様からお寄せいただきました義援金は、被災地の拳士の皆様に届けさせていただいております。また、義援金以外にもたくさんの支援物資や、各地方からボランティア活動にご参加いただき、迅速な支援活動を行うことができました。

この温かいご支援は、被災地の皆様が、未来への希望を持って生きていくための温かい励ましとなり、そして大きな力になっています。

ここにご支援いただいた皆様に謹んで感謝申し上げますとともに、どうぞ今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

☆少林寺拳法グループは、2012年4月1日より「東日本大震災復興支援本部」と名称を改め、引き続き支援して参ります。

☆義援金をお寄せいただいた方々のご芳名は、少林寺拳法公認ウェブサイトに掲載させていただきます。

少林寺拳法

検索

僧階昇任者

権大導師

■2012年4月1日付

鴻田 健将(松ヶ崎スポーツ少年団)
小林 博紀(本部道院)
富田 雅志(本部道院)

中導師

■2012年4月1日付

安住 光平(石狩花川道院)
小原 巧久(盛岡北道院)

宮路 文男(埼玉羽生道院)
加藤 明彦(大日道院)
山下 真由美(東京表参道道院)
倉田 豊彰(高岡古城道院)
石川 光彦(碧南南道院)
尾崎 勝雄(愛知日進道院)
金森 智徳(京都峰山道院)
川口 竜太(長崎波佐見道院)
笹山 敏夫(長崎川棚道院)

権中導師

■2012年4月1日付

佐々木 彰司(川越道院)
竹之内 智則(東京千代田道院)
佐々木 智行(鷺沼道院)
外山 典央(岐阜住吉道院)
加藤 伊織(浜松可美道院)
木村 千賀子(山科道院)
中井 強(大阪北道院)

田中 徳幸(大阪大正道院)
松野 剛(播州志方道院)
眞鍋 幸義(西宮今津道院)
永井 巖(松江中部道院)
入口 睦男(高松中央道院)
竹内 猛(豊南道院)
芝 慶三(鬼北道院)
山本 堅一郎(愛媛宇和道院)
長淵 義典(福岡大川道院)

法階昇格者

正範士

■2012年1月8日付

柳下 智宏(今治道院)
渡邊 史生(鬼北道院)
神田 憲和(東京小平道院)
宮本 繁(長野更埴道院)
久保田 勲(東京小平道院)
眞鍋 幸義(西宮今津道院)
大鹿 真毅(愛知神領道院)
飴谷 浩司(奈良御杖道院)
村上 好徳(防衛省)

■2012年3月18日付

近藤 悦朗(西条道院)
吉本 義明(高松香西スポーツ少年団)
岡 寛(梅津道院)
蔭山 秀夫(徳島川内道院)
杉田 幸治(湯布院道院)
高野 實(京都西道院)
山下 啓(豊中桜塚道院)
清水 孝美(徳島南道院)
金子 成六(多治見南道院)
横山 一豊(山梨八代道院)
忽滑谷 哲夫(国立道院)
田畑 等(東貝塚道院)
小松崎 忠雄(茨城出島道院)
福尾 喜正(泉州東鳥取スポーツ少年団)

後藤 典明(富田林北道院)
西芝 重雄(八尾太子堂スポーツ少年団)
伊藤 公文(大阪難波道院)
上平 幸生(那智勝浦道院)
大西 文雄(観音寺スポーツ少年団)
福沢 昭文(山梨石和道院)
齋藤 雅比古(千葉花見川道院)
小河 清昭(三重久居道院)
藤原 一成(神戸製鋼神戸)
長松 明男(小豆島道院)
水田 孝(明石東道院)
服部 俊美(豊田末野原道院)
後藤 隆志(板橋蓮根道院)
渡辺 孝藏(東京王子道院)
田原 敏正(富山有磯道院)
島田 政雄(埼玉行田道院)
向田 弘之(本部道院)
梶島 貞幸(久留米南道院)
青木 幸治(埼玉吹上道院)
宮幡 義友(山梨郡内道院)
川端 義久(東京大泉西道院)
竹熊 浩一郎(八幡永犬丸道院)
杉山 英利(富士南道院)
香川 薫(埼玉久喜道院)
塚本 隆二(一宮北道院)
佐藤 恭市(山形中部道院)
鍛田 明年(大和郡山道院)

藤崎 隆志(東海葵道院)
鬼澤 昌宏(千葉県立成田国際高校)
松浦 茂光(愛知五条道院)
佐藤 岩男(甲州大月道院)
中川 英幸(松山北道院)
前野 英夫(徳島大津道院)
伊藤 常雄(帝塚山大学)
西川 和弘(延岡工業高校)
遠藤 浩克(名古屋高針道院)
佐藤 一明(新潟海老ヶ瀬道院)
黒瀧 善男(成増北道院)
狩俣 恵永(青梅今井道院)
藤井 省吾(本部道院)
中野 嘉久(三重箕曲道院)
牛島 匡(摩摩聖ヶ丘道院)
福田 元之(鹿児島西道院)
坂田 要(犬山北道院)
松田 正道(新潟万代道院)

准範士

■2012年3月18日付

北治 都夫(鳴尾道院)
内藤 高正(山梨峡西道院)
杉原 正哉(大阪南百済道院)
富山 武夫(農林水産省)
廣田 芳幸(三重桑名道院)
田子 俊文(平道院)
三村 充弘(調布道院)
柏井 勝見(小田原道院)

青木 賢隆(富良野光明寺道院)
喜多 竜巨(高松東道院)
鈴木 聖一(北海道深川道院)
初鹿 朗(山梨峡南道院)
森 英傑(鎌ヶ谷初富道院)
野口 恒(箕面北道院)
濱田 公正(宇和島道院)
手島 守(埼玉深谷道院)
北川 博康(一宮中部道院)
山下 研治(愛知浄水道院)
渡邊 巖(宇和島道院)
深澤 寛司(山梨峡南道院)
稲増 哲(A.C.C)
十川 真悟(坂出専修道院)
中川 貴司(川崎西道院)
丸岡 正行(埼玉深谷道院)
深澤 宏(海老名道院)
三好 広高(横浜片倉道院)
大庭 一真(坂出専修道院)
笹井 直紀(朝霞自衛隊)
森 貴臣(横浜緑園道院)
田島 啓一(新宿北道院)
松浦 俊也(盛南スポーツ少年団)
村瀬 晃啓(町田南道院)
小清水 住男(札幌あかしや道院)
平井 浩司(東京都交通局)
浦田 稔(坂出専修道院)
木村 邦彦(清須西道院)

お布施

▷田原正晴 岡山光南道院 50,000円
総本山少林寺改修基金 ▷林昌幸 埼玉早瀬道院 100,000円

開祖忌法要 ▷諏佐一義 川崎柿生道院 10,000円
開祖忌法要(東京別院) ▷松木長實 鷺沼道院 10,000円

夏の帰山行事について(お知らせ)

大きな道場、本堂で行う鎮魂行、全国の拳士と一緒に修練、代表法話、職員による演武などなど。本山の雰囲気を感じてみませんか。ご家族、後援の方々と一緒に、ぜひご参加ください。

開催日：8月26日(日)
時間：8時受付開始 12時終了予定
内容：記念撮影、法話、技術修練、演武見学ほか
担当：宗務部布教課 富田

7月の本山行事

7日(土)～8日(日) 講習会1次
8日(日) 僧階補任講習(中導師・大導師)
20日(金)～22日(日) 道院長資格認定研修会
8月の本山行事
26日(日) 帰山

告示

播磨南道院 行武 清氏の件

2012年2月25日付にて、金剛禅総本山少林寺規則施行細則第7条第1項により、以下のとおりとする。
すべての資格を剥奪^{はくだつ}して、破門とする。

編集後記 ▶ 5月21日、国民の多くが注目した金環日食。多くの人々が公園や駅などで足を止め日食に向かっている姿を横目に、教団の団旗が制定されたころの写真を思い出した。▶開祖の人々への調和への思いと、人類和合と絶対平和を表す「団旗」、思いを含めた白地の日輪、内円の月輪、中心の卍を。一致団結、技を磨き、もって人格の陶冶を誓った思いを。▶日食を見ている人々が平和へのメッセージを覗いていることを期待しつつ、布教への道を誓う。 (お)

表紙 ▶ **河合 修** 愛知県出身。日本を代表する写真家・藤井秀樹氏のアシスタントを経て独立。2009年5月より「ダーマ」をテーマに、『あ・うん』の表紙撮影に取り組む。ホームページは「写真家 河合修」で検索！名古屋千種道院、中拳士三段。

金剛禅総本山少林寺オフィシャルサイト▶

<http://www.shorinjikempo.or.jp/religious/index.html>
2週ごとに更新される代表メッセージをはじめ、「宗門の行としての少林寺拳法」を動画でご覧いただけるほか、誌面に掲載しきれなかった記事・写真も掲載されています。

あ・うん | vol. 23
金剛禅総本山少林寺広報誌
2012 文月・葉月

2012年7月1日発行(奇数月1日発行)

発行人：浦田武尚

発行所：金剛禅総本山少林寺

〒764-8511

香川県仲多度郡多度津町本通3-1-48

☎0877-33-1010

<http://www.shorinjikempo.or.jp>

編集人：大澤 隆

企画・編集：金剛禅総本山少林寺東京別院

〒170-0004

東京都豊島区北大塚2-17-5

☎03-5961-1400

e-mail aun@shorinjikempo.or.jp

印刷・製本：(株)ブル・ドック

※本誌の発行に掛かる費用には、SHORINJI KEMPO UNITY によるライセンス事業の収益金が活用されています。

広報誌『あ・うん』追加発送について ◇◇◇◇◇

現在、広報誌『あ・うん』を1道院につき10部ずつ(一般財団支部は1部ずつ)、毎号ご提供させていただいております。更に追加をご希望の方は本山宗務部にお申し出ください。(追加1部につき50円・送料別途要)

TEL.0877-33-1010

e-mail : fukyoka@shorinjikempo.or.jp

いち ご いち え
一期一笑



イラスト／大原由軌子

三軒茶屋道院 小堤啓史

瓦礫の後に咲いた花

3・11東日本大震災の翌月、宮城県南三陸町の加藤誠一宮城歌津道院道院長のお宅の片づけをお手伝いさせていただきました。そのときは想像を絶する状況に、加藤道院長にかける言葉が見つかりませんでした。土砂まみれの中から掘り出される生活の破片。その一つ一つに何らかの感情を持って接したら何も手が出せず進まなくなるのでは……そんな恐れに似たものを、支援活動に参加した拳士皆が持っていたのかもしれない。黙々と身体を動かし続けた記憶があります。道院長が流されていた涙と、ただただ瓦礫ばかりの地。その先に広がる青く澄んだ空、そして海。その対比がやけに印象深く心に刻み込まれました。

昨年末、加藤道院長からお手紙を頂きました。お礼の言葉を丁寧につづった便箋にある1枚の画像。あのとき、土をふるってガラスの破片を集め続けた先生宅の庭先とそこに咲く美しいコスモスの花でした。文中の「家は解体を待つばかりです」という言葉の重みを感じつつも、瓦礫のあとに花が咲き、道院長がそれを心に留め、写してくださいっていることに、それだけでも行かせていただけてよかったと思えました。ただ、花の背景にはあのとき見たままの廃虚が……私たちに日常が戻ってきていても、被災地にとって復興はまだ本当にこれからです。この震災から何を感じ、学ぶのか。そんな思いが胸に湧いた瞬間でした。

投稿大募集 道場や拳士のちょっとした話を募集しています。※ペンネーム可ですが、必ず、名前、所属、連絡先もご記入ください。なお、原稿内容の整理・編集をさせていただきます場合があります。原稿の選択はご一任ください。〒170-0004 東京都豊島区北大塚2-17-5 東京別院 広報誌担当宛
TEL.03-5961-1400 FAX.03-5961-1401 e-mail : aun@shorinjikempo.or.jp

Nio Ken, Ryusui geri



宗門の行としての少林寺拳法

に おうけん りゅうすいげり
仁王拳 流水蹴

上段直突、もしくは手刀打に対し、上体は流水受でかわしつつ、瞬時に蹴り反撃を行う。その名のとおり、流水のごとき円滑な体捌きと、瞬間の虚実を見極めた反撃が必要である。初歩の段階では、攻者に緩急を調節してもらい、数をかけ、攻防の間合いと機会を学ぶことが修得の早道である。

撮影／近森千展 文／永安正樹 演武者／守者：永安正樹 准範士六段 攻者：飯野貴嗣 准範士六段



SHORINJIKEMPO